

完結のラストラン 高橋源一郎

十二月二十一日の金曜日、わたしはサ
ンケイスポーツ主催の「有馬記念堂前夜祭」
に出席した。出席したトラックマンや記
者の中にオグリキャップを推す人間はい
なかった。壇上で予想を求められたわた
しは「今晚、帰って考えます」と答えた。レ
ースを二日後にひかえ、わたしはかつて
味わったことのない、奇妙な思いにとら
われていた。

前夜祭の後、打ち上げの席でわたしは
野平祐二調教師に「ほんとうのところ、オ
グリキャップの具合はどうだと思われ
ますか」と訊ねた。

「そうですね」野平調教師は少し考えて
から「わたしには悪いようには見えません。
みなさんはいろいろおっしゃっています

が、わたしの見たかぎりでは、そんなに
悪い状態には思えないのですよ」と答え
られた。

わたしは家に帰ると、机に向かい、し
ばらくぼんやりしていた。予想を書いて
送らなければならなかったが、なんだか
とても疲れていて、なにも書く気にはな
れなかった。わたしはぐずぐず時間をつ
ぶした。ずいぶんひさしぶりに寺山修司
の競馬エッセイをばらばらめくったりも
した。「寺山さんが生きていたら、どんな
予想をお書きになったろう」そうわたし
は思った。オグリキャップを本命にした
だろうか。時計が四時を回った。わたし
は冷蔵庫からビールをとりだすと、居間
に行き、暖房をつけた。そして、ビール

を飲みながら、オグリキャップのレース
を収録したビデオを見はじめた。七馬身
差をつけたニュージューランドトロワイ
ランドヒリウを競り落とした高松宮杯
最初の毎日王冠、最初の天皇賞。いつの
間にか、起きたでしてきたワイフが黙っ
て横に座った。最初のJC、タマモクロス
をついに捉えた有馬記念、五歳、イナリ
ワン、スーパークリクと激しく競り合
った毎日王冠、天皇賞、いまだに信じら
れないマイルCS、そしてホーリックス
を追いつめたJC。フィルムを逆回しす
るようにする後退していく三度目の
JCが終わると、テレビの画面は砂嵐に
変わった。知らないうちに、ワイフの姿
は消えていた。わたしはビデオのスイッ

チを消し、暖房を切った。
次の日になっても、わたしの頭は膜が
はったように少しも動かなかった。何本
も友人から電話がかかってきた。ここ何
日かの間に彼のレースをビデオで見直
したんだ。同じ言葉が電話口から聞こえた。
この目で見たレースなのにもうずいぶん
昔のような気がするんだよ。受話器の向
こうで友人はそう言った。まだ見ていな
いレースがあと一つしかないと思うとと
てもさびしいね。そうだね、とわたしは
答えた。だから、と彼は言った。明日は
ちゃんとレースを見たいね。明日、競馬
場へ何が起こるか、その結果を目をはっ
きり開けて確かめたいんだよ。そうつけ
加えると彼は電話を切った。



写真・久保吉輝

わたしは再び机に向かうと、わたしの
義務を果たした。◎をホワイトストーン
につけ、それからいくつかの印をメジロ
ライアンやメジロアルダンやゴースイン
につけた。わたしは自分の予想を読んで
みた。それはわたしの知らない他人が書
いた文章のようだった。わたしは最後に、
生まれてはじめての♥という印をオグリ
キャップにつけ、オグリキャップの単勝
しか馬券は買わないつもりだ、と書き添
えた。もう、何もすることはなかった。
後はレースを見るだけだった。

先頭に立つのが見えた瞬間から、わたし
の頭の中はからっぽになっていった。長い、
長い直線だった。いま、それが目の前で
起こっている出来事なのに、少しも現実
感がなかった。わたしは大きな声で叫ん
でいたようだ。でも、何もおぼえてはい
ない。

レースが終わった時、右手に握ってい
たはずの帽子が姿を消していた。わたし
の耳には、わたしが生涯で聞いたもっと
も大きなどよめきがまだ残っていた。赤
い目を潤ませて近づいてきたワイフがわ
たしを見て不思議そうに「顔が歪んでる」
と言った。「顔が歪んで」いたのはわたし
だけではなかった。地を揺るがすような

歓声の中で、いっしゅん凍りついたよう
に静寂に包まれた記者席では、何人もの
記者の顔もまた「歪んで」いた。わたした
ちは表情を作ることができなかった。言
葉を発するものもまたいかなかった。わた
したちはそれを確かに見たのだ。どんな
言葉もそれに付け加える必要などなかつ
たのである。中山競馬場が夕闇に包まれ
た頃、わたしは記者席のテラスに身を乗
り出して、レースを繰り返し映している
ターフビジョンの画面に見入っていた。
オグリキャップは何度も先頭に立ちをし
てそのままゴールインすると、画面の中
のまだ明るい陽の差すターフを1コーナ
ーに向かって駆け抜け、そしてずつと遠

くへ走り去っていった。
すべては過去になり、わたしたちは見
たものを記憶の中に保存する。目を閉じ
れば、あらゆる記憶の中の出来事と同じ
ように、わたしたちは1990年十二月
二十三日の有馬記念の最後の直線走る
オグリキャップの姿を思い出すことがで
きる。物語はいつか完結し、その瞬間か
ら記憶の中で第二の生命を生かすはじめる。
そのことをよく知りながら、それでも、
ターフビジョンも消えすつかり闇に閉ざ
されたスタンドの一隅にいつまでもたた
ずんでいたわたしは、もう彼の走る姿を
この目で見ることはないという事実を理
解できないでいたのである。

3コーナーから4コーナーに向かって、
オグリキャップの白い馬体が躍るように